

去る11月21日、上智大学に於いて、「第一回戦史検定」が午前・午後の二部編成にて実施された。当日は天候にも恵まれ、会場には全国から多くの受験者が参集して下さった。来場者の多くは席に着くと熱心に戦史関連書物に目を通しはじめる等、検定に関する関心の高さが伺えた。

また前日には、靖国神社で、受験対策セミナーを催行したところ、全受験者の四割以上の聴講者が参加された。



受験を通して戦史を再認識する

第一回戦史検定開催！
事前セミナーに百五十名余、検定は百九十名が応募



発行所

特定非営利活動法人
JYMA日本青年遺骨収集団
〒102-0076 東京都千代田区五番町2
番町パレス303号室
TEL03-6268-9939
FAX03-3239-0109
URL : <http://www.jyma.org>
e-mail : info@jyma.org
発行人 山口 美朝
編集人 山澤 健太

新規事業に確かな手応え

朝早くから会場準備に駆けつけたJYMA学生メンバーは、各自の担当配備に備える。会場誘導役、受付役、試験官役、皆の顔に緊張が見えた。それもそのはず、今回の戦史検定プロジェクトは一年という長い道の程の集大成なのだ。

我々学生一同も早朝から受験者の誘導のため、固唾を飲んで来場者を待ったが、午前午後とも集合時間前になると続々とご参集頂け、心配が喜びに変化する思いであった。

企画当初、「新しい戦歿者慰霊の形はないか？」という模索を通じ、学生をはじめとした実行委員会が辿り着いた方策こそ、この「戦史検定」だった。年輩者も、若い人も、戦史を学習し知識を試しながら、かの大戦の意義を見据え、その原資を用いて、年々荒廃の声が届き、懸念されていた在外慰霊碑の保守・保全活動という妙案だった。しかし、検定運営という面では知識がない故に試行錯誤し、まずは、様々な知識人への協力依頼から始めた。

問題作成委員会、事務局業務、当日運営を委員会内で分業しつつ、学生・理事の懸命な広報呼びかけで協力者が集まりはじめると、各員、皆手応えを感じられるようになっていった。初期の段階では「夢物語」と思われたプロジェクトは徐々に形になりはじめていた。

今回の検定受験で集まった受験費の一部は、所期の目的通り、ソロモン諸島ガダルカナル島の、民間建立の慰霊碑再整備計画の費用に充てられる予定だ。戦史に関心を持つ事で受験し、受験したことで戦後の援護事業の問題解決の一助となるための足掛かりとなるのではという期待は



学生達も受験者が円滑に受験出来るよう



受検者から励ましの言葉も——会場受付の様子

高まる。

今回、我々が主催メンバーとして残したものは、決して小さくない足跡だと信じるものである。

この成果をいかに今後の後輩たちが継続し、定着化していけるかが今後の重要な課題となる。

早速、「関東圏だけではなく、関西方面での開催を。」と次回開催に向けて意欲的な感想も聞こえてきている。今検定開催後、JYMAメンバーには結末に向けた貴重な機会であり、歴代の先輩達の思いを、私たちが実行できたことは、大きな福音であろうと信ずるものである。

優秀な受検者達

今回、受検者は「腕に覚えのある人」が多く、また、前日開催の「受検対策セミナー」による予習とが相俟つて、合格率七十九%、平均点四十点という高い合格率となった。

男女別では、男性八十八%、女性十二%と圧倒的に男性が多かったが、会場内に女性の姿がアクセントとなり非常に目立った。

年齢では最年長が八十六歳、最年少が十二歳で、ともに優秀な成績で合格された。年代別では二十代〜四十代が約六割を占め、七割は社会人の受検者であった。

受検者の声(抜粋)

・元々当時の日本戦争歴史には興味があったが、子供の頃の教育では曖昧で分からない部分も多々あった。戦史検定を通して学習することは日本を見つめ直す意味でも意義のあることだと思ふ。(30代男性)

・こういう取り組みを期待していました。もつと広くCMし、実施会場や回数を増やシメジャーな検定にし

て頂きたいです。(50代男性)

・よくぞ考えてくれました。大変すばらしいです。(60代男性他多数)

・教科書にはない正しい歴史を学ぶことができる検定(30代女性)

・遠方からの受検者が多数いて驚きました。もつと世間に広めていってほしいです。(60代男性他多数)

・いいところに目をつけたと思う。日本側からみた戦史は一昔前はそれだけで右翼と言われたのだが。

(40代男性)

・非常に好ましい。今の方式で続けたい。(70代男性他多数)

・日本の独立のための第一歩

(40代男性)

・反日歴史教育者や、マスコミの偏向報道に対し、本来の正しい歴史観を日本人に取り戻す第一歩と思ひます。(40代男性)

・戦後世代が多数を占める今、先の大戦や当時の状況を勉強していくうえで正しく理解するきっかけになる検定だと思ふ。(20代女性)

・戦争を未然に防ぐには過去の知識は必要不可欠。(70代男性)

・客観的に日本近代史を問う検定。



前日セミナーにも121名が来場し、推薦図書も頒布した

非常に良かった。(40代男性他)

・もう少し年配者が中心の活動かと思っていたが、青年の方々の活動が発端となっていたと知り、素晴らしいと感じている。(20代男性)

・都区内でアクセスの良い場所であればいい。また事前セミナーを開いてほしい。(50代男性他多数)

・少なくとも五大都市に一会場、前後期各一回実施、公式問題集や傾向と対策の出版を希望。収益向上にも繋がると思ひます。(40代男性)

・ぜひ関西で開催してください！(50代男性他多数)

※アンケートご協力ありがとうございました。

第一回戦史検定報告

現代日本社会への果敢な挑戦の一步となった!

戦史検定実行委員会 実行委員長

小野 泰彦

平成二十二年十一月二十一日

(日)、上智大学の四谷キャンパスで第一回戦史検定が開催されました。午前9時の部と午後9時の部を併せて三百名弱の受検者が集まり、会場教室も一杯になりました。

朝の受付開始前から多くの受検者の方々が会場教室の前に集まって来ていて、会場誘導の学生達を始めとした運営ボランティアの皆さんも甲斐甲斐しく緊張感を持って頑張ってくれる姿に接し、私は非常に嬉しいものがありました。

思えば、六月の受検募集を始めた折には、「どれだけ人が集まるだろうか?」「百名も集まるのだろうか?」「百名も集まるのだろうか?」との不安の思いも頭の隅にはありました。しかし、今となっては結果的には杞憂という形になり、少し安心

して居ります。

受検者は、北は北海道、南は沖縄まで全国各地からの申し込みがあり、年齢も十二歳から八十六歳までのかかなり多岐にわたる多様な方々にご参加いただきました。

九月時点では受検申込者は百名にも満たないものでした。七月位からポツポツとメディアや雑誌に取り上げられるようになって来てから各種問合せも増えて来て、戦史検定のホームページへのアクセスが増えて行き、十月後半から十一月にかけては駆け込むように受検者が増えて行きました。

検定の前日に開催しました事前セミナーも百二十名余の人が集まり、予想以上の盛況だったと思います。その折に、講師の先生が戦史の本を

かなり読み込んで来た方(上級)、それなりに読み込んで来た方(中級)、殆ど初心者の方(初級)に自分はその当るか手上げて貰いました。上級と思われる方が一割程度、中級と思われる方が二割程度、初心者と思われる方が五割以上という手の上がり方でした。これは、比較的若い方々、女性等が予想以上に多く参加しており、今まで戦史に関心がなかった方々からの戦史検定へのアプローチがかなり増えて来ている事が伺うことが出来ます。

八月十五日の靖国神社での集会での笹実副委員長呼び掛けに於いての受検者もいらつしやいました。大学の学園祭で試験のことを知り、参加した学生さんもいらつしやいました。受検者アンケートの中で、私が挨拶で触れた、「戦史を学び、知識となり自分の血と肉とする事が国民としての歴史を獲得して行く事にもなると思います」という話にとても共感してくれました女性もいらつしやいました。

私達、戦史検定実行委員会が目指

したもの、「在外慰霊碑の保全を収益事業にする事」、「国民一般に戦死者が戦われた戦争の歴史きちんとした形で継承する」という二つの目指したのも、受検者の方々や一般の方々にもそれなりにご理解いただけたいことと信じております。

この春から具体的に取組んで参りました戦史検定の第一回が無事終りを迎えたが、これから、もっともっと戦史検定の輪を世に広げていく必要があります。次年度においては、大阪地区での開催や、中・上級の検定もスタートしたいと考えております。

検定問題作成にご協力いただいた監修の先生、問題作成してくれた委員の方々、実行委員会の基盤を支えてくれた有能な事務局の皆様、学生、社会人の皆様にも心からの感謝の気持ちを申し述べたいと思います。戦史検定に関わったすべての皆さんに心から感謝申し上げます。そして、更なる来年のチャレンジに取組んで行ければと思ふ次第であります。

**東部ニューギニア派遣隊帰還!!
二百十四柱の
御遺骨をお迎えす!!**

去る、平成二十二年十一月十日(二十五日の日程にて政府により行われた東部ニューギニア戦没者遺骨収集派遣団が、二十四日に帰還した。

・ 収集柱数 二十四柱

・ 参加隊員 二名

・ 国士舘大学 四年

山本 沙織
豊嶋 美由紀
社会人

山本隊長は今派遣が三回目の政府派遣であり、東部ニューギニアにおける収集活動は二回目となる。豊嶋隊員は遺骨収集派遣初参加であった。

帰還した翌日の二十五日には、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にてお迎えした御遺骨引渡式が行われた。

**二十二年度
沖縄自主遺骨収集派遣実施決定!!!**



青山学院大学四年
中村 貴洋

こんにちは。JYMAの学生代表を務めております中村貴洋です。今年度の派遣も残りわずかとなり、また私たち最高学年の現役として活動する時間は残り四ヶ月となります。振り返ってみると、当法人の自主派遣である沖縄県戦没者遺骨収集は現メンバーの原点でもあります。遺骨収集や戦史について全く知らなかった学生達が、沖縄派遣を機に学ぶことができ、私達学生にできることをやるという信念で活動してきました。その信念が今日にも続いています。今年度も、二月に沖縄自主遺骨収集派遣を実施いたします。現在当法人の活動人員は四年生と三年生がほとんどであり、一年生、二年生が非常に少ないです。世代が変わっても、これからこの団体が継続して活動ができるよう、今回

の派遣にはより一層の力を入れたいと思っています。二十名ほどで、十日間程度の派遣日程を考案中ですが、大半は一、二年生で固め、現三年生にとっても心強い仲間を募集したいと思っています。毎年御指導頂いている国吉氏と具志堅氏にも今年度も御協力をお願いする予定です。また、一日だけではありますが、沖縄県遺族連合会との合同収集も行います。

私達は、遺骨収集の現状や先の大戦に対する記憶の風化を感じ、知っただけに留まらず、同世代や後輩たちに伝えなければならぬと思っています。きっと戦争を経験された方々や遺族会の皆様も当時の仲間や家族、後世のために今できることを続けていると思われる。そういった意味で、今回の沖縄派遣では遺骨収集、現地の勉強はもちろん、仲間の大切さを感じる派遣にしたい所存であります。昨年引き続き、皆様の温かいご支援御助力をよろしくお願い申し上げます。

◆篤志賛助金のお願い◆

上述の沖縄自主派遣実施にあたり、実施費用の一部を例年に倣い、皆様の篤志にて賄いたいと思ひ計画をしております。つきましては、経済情勢の厳しい昨今において恐縮ではありますが、皆様には本派遣へのご理解とご協力の程を伏してお願い申し上げます。

一口：3,000円 (目標200口、600,000円)

篤志賛助金のお振込先は

・ 銀行振込：みずほ銀行 市ヶ谷支店 普通預金
口座番号：2069148
口座名：JYMA事務局

・ 郵便振替
口座番号：00110-3-6688
口座名：JYMA事務局

平成二十二年度 シベリア鎮魂慰霊祭開催される!

去る平成二十二年十一月三日、東京の千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、シベリア抑留中に亡くなられた方々の慰霊を行う「シベリア鎮魂慰霊祭」が、「東京ヤゴダ会」によって執り行われた。冬の近づきを感じさせる寒波にも負けることなく、会場には抑留経験者の方々から構成される「東京ヤゴダ会」の皆様を始め、多くの御遺族、御遺児の方、関係者の方々が御参列され、シベリアの過酷な環境に於いて亡くなられた御霊に対し手を合わせ、黙祷を捧げた。当法人からは、今年度の「ロシア沿海地方派遣」に参加した法政大学四年の藤浪達哉、フェリス女学院大学四年の中山重理沙、昨年度のロシア派遣に参加した中村貴洋、宇都宮大起など数名の学生が参列した。

「東京ヤゴダ会」の会長を務める茨木氏は、毎年政府によって行われている抑留中死亡者の遺骨収集

派遣の際、事前の勉強会におけるご指導や資料の提供、また、今回のような報告の機会を設けてくださったっており、我々は年間通じてお世話になっている方だ。

「東京ヤゴダ会」の皆様は、お会いする度に驚かされる。身を縮めたくならない冷たい風が吹く中でも、ヤゴダ会の皆様は弱音を吐かず、笑顔を絶やさず。この笑顔や元気は、シベリアの地で厳しい環境を生き抜いてきたからこそのものである。我々も就職難などで弱気になることなく、諸先輩方の意志を継ぎ、一刻も早くシベリアの地に眠る御遺骨をお迎えした



会場には多くの方が参列した

「水戸歩兵第二聯隊ならびにペリリ ユー島守備隊戦没者合同慰霊祭」 に当法人より三名が参列

十一月二十三日(祝)、茨城県護国神社に於いて今年も木々が紅葉で彩られるなか、水戸二聯隊ペリリユー島慰霊会の主催で慰霊祭が挙行され当法人より事務局長の宇都宮大起、拓殖大学三年生の山口美朝、高橋孝征の三名が参列した。当日は生憎の雨模様にも関わらず、多くの方々が参列され、招待客として茨城県を選挙区とする国会議員の姿も見受けられた。

慰霊祭は十時半より第一部が開演され、参列者の紹介や、ペリリユー島に関する説明が行われた。

続く第二部は十二時より神社本殿に於いて行われ、神饌や祭文奏上、玉串拝礼が行われた。

尚、今年の慰霊祭を最後に、現副会長の田崎氏が会長に就任した。同会の今後の益々の御発展を心より祈念致します。

【慰霊祭に参加して】

宇都宮 大起

(拓殖大学四年)

大学一年生の時に本慰霊祭に初めて参加して以来、今年で四回目の参加となった。

本慰霊祭に私が参加を続けている理由の一つに、パラオに於ける遺骨収集に対する気持ちがある。

私が大学に入学したのは平成十九年度であるが、同地に於いて最後に遺骨収集派遣が行われたのは平成十八年度である。私が遺骨収集に携わろうと思った理由の一つにパラオ共和国に対する深い関心があったからだ。そのパラオで英霊の御遺骨収集をすることを毎年願うと共に、ペリリユー島で散華された英霊の御霊を顕彰してきたが、同地で遺骨収集という願いは在学中には、残念ながら叶うことはなかった。個人的に今後も慰霊祭に参加しつつ、同地における収集が再び開始され後輩達が御遺骨をお迎えしてくれることを願ってやまないものである。

硫黄島派遣報告文

英霊の戦い未だ終結せず



東京国際大学四年
青 坂 健 一 郎

私は、十月六日より十月二十二日までの十七日間、東京都内唯一の激戦地硫黄島において、政府主催第二次硫黄島遺骨収集調査団にJYMA日本青年遺骨収集団の一員として参加した。

今回の派遣団はJYMA、日本遺族会、硫黄島協会のご遺族の方を始め、硫黄島旧島民の会、小笠原村在住の方、小笠原村役場職員、厚生労働省職員、後方支援として陸上自衛隊化学部隊や不発弾処理部隊の方、二十五名が参加し、在島の航空自衛隊と海上自衛隊の方も作業に加わった。

私は、今年三月沖縄に行き、南部の摩文仁にある黎明の塔で、まだこ

の塔の下の崖には沖縄戦で戦った英霊のご遺骨が収集されずに残っているという話を聞いて衝撃を受けた。

まだ、沖縄の為そして、日本の為に戦ったご英霊の方が戦後六十五年経ってもまだ報われていないことを感じ、私にも何か出来ないかと思いい、日本の為、そしてご英霊の方の為に遺骨収集をやろうと決意した。

最初の一週間、島北部の地下壕の中で行った作業は、壕の中の温度が八十五度と人間が二、三分作業を行うのが限界な場所、約五分間スコップとつるはしを持ち、中の土をリレー方式で出してゆくというものだった。地下壕の奥を掘るごとに土から蒸気が立ち込め前が見えず、人

人立っていることがやっとの狭さの中、ご遺骨やご遺品を探して掘っていった。

地下壕からは、防毒マスクのレンズや、手榴弾、機関銃、多数の銃弾、鉄兜(ヘルメット)の破片が見つかったが、ご遺骨をお迎えすることは出来ず、皆悔しい思いをしたことを私は忘れることができない。

作業に参加された最高齢のご遺族の言葉が印象に残っている。

「私は、硫黄島で戦った兵隊さんの苦勞を少しでも何万分の一でも分かってあげたいと思いい参加した。年だから、作業中腰や体を痛めたり怪我すると、皆に迷惑を掛けたり、兵隊さんの苦勞を労うことが出来ないから、参加する前にジョギングとか運動をしたおかげでどこも怪我や痛めることなく、兵隊さんの苦勞を労うことが出来て良かった。」

次の一週間は、集団埋葬地と思われる場所の一つ、自衛隊基地滑走路西側で作業を行った。気温が四十五度の炎天下の中、重機で掘った砂山の中をスコップや熊手を使って丁寧

にご遺骨が紛れていないかを確かめる作業だった。

私達が作業を始める前に作業を行っていたメンバーがすでに一柱お迎えしていた。私は、すでに作業を行っていた日本遺族会の方と二人で砂山の中からご遺骨の探索をしていた。

時折、砂が崩れ作業が難航したが、足の部分の骨等、幾つかご遺骨をお迎えすることが出来た。

ある時、砂の山から歯が幾つか出てきた。歯が見つかるということは、頭蓋骨が出てくる可能性があるの、遺族会の方と懸命に頭蓋骨を探したが、とうとう見つかることが出来ず、またも悔しい思いをした。

結果、二つある集団埋葬地において、計五十一柱のご遺骨をお迎えすることが出来た。

安置室から天山慰霊碑にある納骨堂まで、ご遺族の方や厚生労働省の方のご配慮で、ご遺骨の入った袋を捧持させて頂く機会を頂いた。作業が終了し、拝礼をした後、ご遺骨が入っているザルからご遺族の方と一

一つ丁寧に袋に移し替えてそれを持つ。ご遺骨を手入れながら袋を持った時に自然と涙が出てきた。ご英霊の方に対し、今まで日本を守る為に戦って下さって本当にありがとうございます。六十五年間お疲れ様でした。という気持ちになった。

十月二十日、帰島報告の際に隊舎から天山慰霊碑の所にある納骨堂へ車でご遺骨の入った白い箱を捧持した時も、涙が止まらなかった。そして、ただただ頭を下げるしかなかった。

車が天山慰霊碑に近づくにつれて、昭和二十年三月で硫黄島の戦いは終わったのではないのだ、今回お迎えした五十一柱のご英霊の方は本土の地を踏むことが出来るが、まだ一万三千柱のご英霊が本土の地を踏むことなく、この島の地下壕や土の下で眠っていることを考えれば、ご英霊の戦いはまだ終わっていない。そう感じた。

作業休養日の一日、私は日本遺族会の方々の慰霊巡拝に同行させて頂

いた。車で約四十分あれば島内一周することが出来る位小さな島だが、実際に車で島内を周ると、ここが六十五年前激戦地であったことを実感することが出来る。

島のあちらこちらには、日本軍の高射砲や速射砲、砲台が当時のまま転がっていたり鎮座されており、日本軍が使用した飛行場跡や無数にあるトーチカや地下壕の入り口、道の両側に等間隔で並んでいる慰霊塔や米軍のシャーマン戦車やB29のプロペラや胴体、弾薬庫、通信施設、軍用トラック等が当時のままあったりと、ここが大東亜戦争の激戦地であることを物語っていた。この光景を見て、私は衝撃を受けた。

日本国内で同じ大東亜戦争の激戦地である沖縄とは百八十度も違うという印象を受けた。観光地化や人々の生活感のある沖縄と違って、硫黄島は手つかずのまま大東亜戦争当時の姿が残っている貴重な場所だと感じ、硫黄島こそ大東亜戦争の激戦地ではないかと思った。

慰霊巡拝に同行して印象に残った

のは、ご遺族の方が縁のある慰霊塔や地下壕の入り口に向かって「お父さん来たよ」「また来るからね」と語りかけながら、本土から持ってきた水やお酒、お米を捧げていたことである。

あるご遺族の方が私に、「今、自分の家のお墓の中にある白い箱には、父の名前を書いたものが入っていて、硫黄島で戦った父の遺骨はななんだよ。だから、この慰霊塔が父の墓みたいなものなんだよ」と話された時、ご遺骨を一柱でも多くお迎えすることの大切さを実感した。

私は硫黄島での遺骨収集を行って、ご英霊の方々に対して感謝の心を持つということの大切さを知り、ご英霊の方と向き合えることが出来たという大きな経験ができた。遺骨収集に参加して、実際にご英霊の方のご遺骨を目の前にしてどうして今まで大東亜戦争で戦ったご英霊の方々に対して感謝しなかったのだろうかという疑問をもつほどであった。こうして戦われた方々に対して、感謝の心を持つことの大切さを気付けたの

は私にとって非常に大きなことだったと思う。

今、硫黄島始め、フィリピンや東部ニューギニア等の大東亜戦争の激戦地やシベリア抑留の地にはまだ約百十三万柱の日本兵の方々のご遺骨が日本の地を踏むことなく、地下壕や土の中に眠ったままである。私はこの硫黄島派遣を通して、戦争を知らない若い人が、六十五年前日本のために戦った方を知る良い機会でもあり、自らの命を捨てて戦った方々の上に今日の私達がいるということを知るとしても貴重な体験であるのだと実感した。そして私は、大東亜戦争で戦った方々を本当の意味で知ることができたと思っている。

また、ご英霊の方や遺族の方にとって大東亜戦争は終わっていないのであるということ、身を以て知ることができたのである。

最後に、お世話になりました厚生労働省、日本遺族会、硫黄島協会、小笠原村、陸上自衛隊の方々にこの場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

戦史検定受検者のみなさま

＝戦史検定を受検下さりありがとうございました＝

戦史検定を、受検や篤志ご賛助、監修や景品供出などでご支援くださったすべての皆様に、JYMA日本青年遺骨収集団学生一同、心より御礼申し上げます。

皆様からのエールを頂き、本事業の定着化に向け、更なる努力を積み重ねる所存です。

皆様には引き続き、ご指導ならびに、更なる検定への挑戦を頂けますことをお願い申し上げます。

戦史検定実行委員会一同
JYMA日本青年遺骨収集団学生一同

靖国神社に参拝を ⑥

意見広告



東京・九段の靖国神社には、日本の危急存亡に際して、尊い命を捧げた250万の戦没者(英霊)の御霊をまつています。

英霊にこたえる会中央参加団体 旧戦友連 代表 佐藤博志

〒230-0017 神奈川県横浜市鶴見区東寺尾中台8-6 TEL&FAX：045-571-6965

社頭広報出席者

平成二十二年十月三十一日

旧戦友連 赤堀光雄/石橋聡/内藤寿美子/太田弘樹/牛丸美奈子/内田二郎/藤野茂

JYMA 赤木衛/宇都宮大起/山本沙織

平成二十二年十一月三日

旧戦友連 赤堀光雄/石橋聡/鴨尾進/井上達雄/内藤寿美子/太田弘樹/牛丸美奈子/藤野茂/内田二郎

JYMA 赤木衛/宇都宮大起

平成二十二年十一月七日

旧戦友連 赤堀光雄/石橋聡/井上達雄/内藤寿美子/内藤寿美子/太田弘樹/牛丸美奈子/菊地智太

JYMA 赤木衛

平成二十二年十一月十四日

旧戦友連 赤堀光雄/石橋聡/鴨尾進/井上達雄/内藤寿美子/内藤寿美子/太田弘樹/藤野茂/松田由美

JYMA 宇井豊/赤木衛

平成二十二年十一月二十一日

旧戦友連 赤堀光雄/石橋聡/鴨尾進/秋山誠治/井上達雄/田淵甲太郎/内藤寿美子/太田弘樹/牛丸美奈子/菊地智太/榎泰智/松田由美/藤野茂/内田二郎

JYMA 宇井豊/宇都宮大起

平成二十二年十一月二十三日

旧戦友連 井上達雄/内藤寿美子/内藤寿美子/牛丸美奈子/牛丸準人

JYMA 赤木衛

平成二十二年十一月二十八日

旧戦友連 赤堀光雄/石橋聡/鴨尾進/井上達雄/内藤寿美子/内藤寿美子/太田弘樹/牛丸美奈子/榎泰智/松田由美/内田二郎/森岡斉/白石一朗/榎田祐亮

JYMA 宇井豊/赤木衛/宇都宮大起/山本沙織/川又祐子

◆編集後記

★今年の一大事業であった「戦史検定」が無事に終わった。検定終了後、安堵の思いで感極まったJYMA学生、仕事と両立しながら実施に臨んだ理事の方々の表情は晴れ晴れとしていた。なかでも事務局を運営してくださった井上夫妻の尽力には学生一同感謝の思いでいっぱいである。二五〇人以上の検定受験者を滞りなく誘導し、学生に適切な指示を送った。だからこそそこまで形に出来た。／今回の戦史検定を通してJYMA一同の中にはさまざまな自覚が芽生えた。後輩たちは早速来年度以降の展望を話し始めたようだ。「皆で協力し合えば、どんなこととも乗り切れる」。彼らの目の色が変わった。／検定事業を通して得たものは大きい。来年度以降も継続的に、そして徐々に規模を伸ばしていけば戦争考察という観点で国民に再検証を促せる。その方法論を今年確立できた。あとはそれをどのように引き継いでいくかである。／まだまだ我々四年も後輩たちに残さなければならぬもの、引き継がねばならないものが多々ある。残りの学生生活で何が出来るかを探る。模索しながら邁進していきたい。(健)